

ホームカミングデー 知的・身体障害福祉分野分科会 (赤塚俊治先生)

<参加者が抱える現状と交流会内容の報告>

- ・知的障害者施設に勤務しているが、人件費削減の現状から契約・非正規職員が多い。30～40代が存在せず、職員育成・リスクマネジメントを含めた運営管理が困難。家族にクレーマーのような方もいるのも対応が難しいことが多い。
- ・社会福祉協議会で就労支援を担当しているが、離職が多いため職員が定着せず、慢性的に人手が足りず、人材も育たない。職場の福利厚生や給与などの問題も大きいと思う。利用者の高齢化も進んでいて、コーディネートの難しいことが多い
- ・聴覚障害に関わるケアを福祉事務所で担当している。自分自身も高齢になってきており若い人に引き継いでいきたいが、人材が不足している現状。
- ・知的障害施設に勤務しているが、障害者との出会いをととても大切にしている。コミュニケーションをとって、利用者主体を守ることができるよう努力している。
- ・ケアマネジャー業務をしているが、障害を持つ母子世帯を支援しているが、母親の年金を娘が使う、自己負担分の未払いなどのトラブルがあった。そこで、自治体に介入してもらい、成年後見人がつくようになったが、現在の対処まで時間がかかってしまった。家族全体を考えたいが、社会保障制度の十分な活用ができていなかった。大学での学びがとても役立った。
- ・NPO法人の障害を持つ児童のデイサービスに勤務している。事業立ち上げのときは、前例がなかったが、現在は周囲にも同様のサービスが増えてきている。障害者を持つ児童への対応が難しいことがまだまだ多い。

→赤塚先生より どのように接していけばいいか、というのは自分自身も学生に対してある。それは、それぞれが持っている自分自身の未熟性があるということ。自らの未熟性を知って対処することが必要なのでは。

- ・グループホームに勤務しているが、アットホームを目指したため、専門知識がないひとを採用した。人材育成はやはり難しいことも多い。また、20代～80代までのとても幅広い年齢層の利用者を抱えている。現実と理想の狭間で揺れ動くことも多く、地域で生活することが本当に幸せか、日中はデイサービスで過ごすなどするため、利用者にとっては地域で暮らすというよりは、施設入所と何も変わらないのではないのか、等悩みは尽きない。

地域からの偏見やクレームは今も多い。

虐待防止策に対しても、グループホーム内の現状と法律とのギャップを感じる。職員待遇や職場環境も充分ではない現状。

→赤塚先生より 現実と法律とのギャップについて、専門職としてどう考え、行動するかを念頭に解決することが必要なのでは。

- ・知的障害者対象のデイサービスに勤務しているが、利用者との距離感が難しい。
現在、転職者も職場に多く、そのひとの人生の中で色々なやり方のようなものが支援の在り方に現れるようだ。

<先生より助言と問題提起>

- ・利用者主体の放棄の現状
利用者と対等な関係を築いていくこと。
- ・コンプライアンスを高め、きちんと業務を評価するよう努めること。
事業所として、自分として、目標を持ち、その場限りの対応にならないよう努力することが必要。
- ・障害者総合支援法が介護保険法と合体する方向
高齢者と障害者の住み分けをどうするか。あと 5 年ぐらいで一体となるようだが、事業者はさらなる経営感覚を持たなければ淘汰されていくだろう。(←先生より、口外不可とのこと)
財源など多くの問題をまだ抱えているが、保健医療福祉が一体化した、より使いやすい一般化された制度を目指すようになるだろう。